

ヘンリー・ジェイムズの

作品にあらわれた場とヴィジョン

——「使者達」へのアプローチ——

小 野 和 人

(一)

ヘンリー・ジェイムズの作品研究にはしばしば彼の用いている場を考察する場合がある。場とは漠然とした表現であるが、実際には大小さまざまな観点から捉えられている。すなわち、ジェイムズが *international situation*（国際状況）というテーマに仕立て上げたアメリカ対ヨーロッパのそれぞれの地盤の説明、またその概括的な印象描写から、主人公の訪れる街角の情景、室内の光景描写等に至る、一連の場所的、空間的意義や効果に関する研究なのである。

一般にこのような研究は作品の舞台装置や背景の研究になるものであって主題そのものを示しているとは言い難いかもしれない。あるいは、必ず主題に接近していけるものであるとしてもそれは至極遠心的、迂回的な近付き方になってしまうかもしれない。とはいえジェイムズは元々遠心的な傾向を帯びていて、中心テーマを明確に規定するよりも、中心らしきものを囲む円周に沿って生じる微細な陰影の印象の方を丹念に描こうとした作家なのである。たとえば「ロデリック・ハドスン」では、ハドスンが惹き起す事件を描いても、出来事そのものよりも、それが主人公マレットの胸中にどのように反映するかには彼は専念した。逆に言えば、主人公マレットの性格づけは、性格そのものとして規定されず、ハドスンの事件という媒介を通して行われた。問題の場に関しても同様のことが言える。「使者達」では主人公の性格や心理やそれに基くアクションも、場という媒体を通してはじめて可能にされるのである。このことに関連して *Stephen Spender* は次の様に強調している。

What James did in fact revolutionize is in the manner of presenting the scene in the novel: and *the relation of the described scene to the emotional development of the characters*.⁽¹⁾

場が示す効果ならびに場とテーマの結びつき以前の事になるが、ジェイムズ自身一旅行家として場に対する根強い愛着があった。その一端は、彼の覚え書きに記されている「使者達」執筆の動機の中にも見受けられる。それには、彼の知人であるアメリカ青年にまつわるエピソードが、彼のかつてのパリ滞在を懐しく思い起させ、彼の想像力を強く刺激してこの作品を書かした次第が詳細に述べられている。⁽²⁾そのエピソードとは、彼のその知人がパリにある古い屋敷の庭園を見物中に、同行した年輩の作家 W・D・Howells から、「老年になって悔を残さぬ様、今のうちに一杯生きなさい」⁽³⁾と語りかけられたということである。その話を聞き、ジェイムズにはその時の光景が彷彿としてきて、自らもそれに立ち合っていたかの如くに共感できた。彼もかつて、その場 フォブール・サン・ジェルマンの古い家々に遊んだことがあったからである。

問題はこのようにパリの古い家並みや庭園が一アメリカ人に熱狂的に生を想起させたという点にある。ジェイムズが懐しみの気持を添えつつ小説の場をパリに定めた理由は先ずこの点にあるし、ひいてはそれが次第にテーマと密接に関連してくるのである。事実、「使者達」に於て、パリという場とテーマとの不可分な結びつきは、E・M・Forster, Percy Lubbock, F・W・Dupee, E・T・Bowden 等々、多くの批評家が遍く指摘しているところである。ことに E・M・Forster は、

Paris irradiates the book from end to end, it is an actor though always unembodied, it is a scale by which human sensibility can be measured,.....it is Paris that gleams at the center of the hour-glass shape—Paris—nothing so crude as good or evil.⁽⁴⁾

と述べてパリそのものをメイン・アクターに掲げている。以上の様な次第で、「使者達」に関しては、場と主人公の密接な結びつき、ないし極論すれば場こそ主人公だとする、いわゆる結論が既に出てしまっている。従って私は、これらの結論に基き、この小説のプロットの進行に沿いつつ、主人公の内面の発展

消長を場の描写と結びつけて再検討してみたい。つまり、結論そのものをでなく、場が果たす役割を主人公のたどるプロセスの面から眺めてみようを試みることである。

(二)

初老の主人公ストレザーは任務を帯びてアメリカからパリへ渡ってくる。その任務とは、パリで十年近く過して放蕩者になり、悪い女に擱っているらしい知人の息子を故国へ連れ戻すことである。パリで遊んでいるらしいから即、放蕩者であり、その遊びの相手になっているらしいから即、悪い女であると推断することは、ジェイムズ執筆当時のアメリカ側の、とりわけニュー・イングランドの人々による純粹、素朴、画一的な見方の現われである。ジェイムズは主人公の出身並びに時代背景について、**‘He is an American, of the present hour and of sufficiently typical New England origin....’**⁽⁵⁾と規定している。「使者達」は1899~1901年にかけて執筆されているから、この小説の場となる新旧両大陸の表現はその当時、19世紀末を映していると考えてよい訳である。ただし、その頃ジェイムズはめったにアメリカに戻らず、彼の第二の故郷となったイギリスの田舎にひきこもり、ひっそりと制作していた点は考慮されねばならない。つまり時代の風俗をリアルに写しているというよりも、それまでの経験に基く諸々の印象を総括しているといった方がふさわしい。とはいえ、当時の両大陸の基本的な要素として、**experience**の旧大陸側と、**innocence**の新大陸側の二つのものの相互関係は変わっていなかったのである。それ故、ストレザーが向うパリと、彼が出発したニュー・イングランドのウーレットという町はたがいに対蹠点になっている。

このウーレット側の画一的な見方に一応同調して渡ってきたストレザーに対し、パリのガイド役をかってでるのがマリアというコズモポリタンの中年女性である。彼女はストレザーとの対話で、彼の問題の尋ね人チャッドに関して、**‘What I was thinking of,...’is the possible particular effect on him of his milieu.’**(Vol. I, P. 69)と述べる。このmilieu(環境)という言葉は話の中心部へ向うための一つの手掛りとなる。要はチャッドの居る環

境、すなわち場の与える影響なのである。彼女はさらに、チャッドがその影響の結果、野性化（brutalized）しているか、あるいは洗練（refined）されているか、二つの可能性があると推察する。‘brutalized’とは、心の抑制を解き放ち、自己の本能に忠実に生きることには立ち戻った姿であり、‘refined’はむしろ外的な意味で、容姿、立居振舞、対話等の洗練、快適さを表わしているようである。事実チャッドはこの二つの要素を一身に兼ね備えてストレザーの前に現れる。成長し変貌したチャッドに接したストレザーは、チャッドの居る環境、ひいては彼の愛人であるらしい悪い女についてのこれまでの単一不動の見方を次第に改めていく。話の焦点はこのストレザーの見方の変化に当てられていき、チャッドの変身という外的な問題はストレザー自身の変身の可能性という内的な問題に置き換えられるのである。

(1) 場による生の暗示

パリ到着後まもなくストレザーはルクサンブール公園に現れる。テラスや噴水や木々のたたずまいを眺め、闊達にゆきかっている人々に眼を留めたとき、その自由な外景とは対照的に、ストレザーの内心では回想が始まる。それは老いの自覚であり、それまでの人生に於ける孤独と青春の不在を認識することである。彼は批評雑誌の編集者として勤勉に働き続け、にぎやかな人々の群に居ながら心は孤独に徹して、人生の与える享楽の面に参与しなかった人物なのである。ここでも、ジェイムズが好んで用いる新大陸のピューリタニズムに基く抑制、プラス主人公の内閉的個性という二重構造による生の不毛の表現がくり返される。

しかしストレザーの開運への兆はない訳ではない。ルクサンブール公園の自由な雰囲気は彼に回想とともに、過去からの脱出、自由で闊達な生への連帯感の萌芽を暗示する。その暗示はストレザーのパリ全体についての初印象と結びつく。パリは彼に開ける新しい生のための新しい場を意味する訳である。

His greatest uneasiness seemed to peep at him out of the imminent impression that almost any acceptance of Paris might give one's authority away. It hung before him this morning, the vast bright Babylon, like some huge iridescent object, a jewel brilliant and hard,

in which parts were not to be discriminated nor differences comfortably marked. It twinkled and trembled and melted together, and what seemed all surface one moment seemed all depth the next.

(P. 89)

彼の得た印象として、パリは人がどのような受け入れ方をしてもその人の権威を取り去ってしまう、パリはあたかも宝石の様に多彩でどの部分部分も判然と識別し難い、輝き震え融け合い、今表面だと思った箇所が次の瞬間には深みになってしまう、と述べられている。

ストレザーの眼を開かせたのはまさしくパリのこの *iridescency* (多彩さ) の印象である。それはたとえその目眩めく輝きに慣れてしまったとしても、なお *variety* (多様さ) の印象として定着する性質のものである。この要素は単に都の外観として、アクションのための舞台背景として述べられているのではない。よく指摘されるようにジェームズの描く場は、その中で行動するキャラクターと本質的に不可分なのである。アメリカ人のストレザーはこれまで充実した生に参加し得なかったし、それを不満と感じかけている。彼がパリを多彩と感じるのは、実は彼の心中でパリの外観が彼の不満、不充足と対比、対照されることに基くのであり、「特別に疎外された人間の持つ情熱的な憧れ」、「生の蜃気楼」と呼ばれるべき現象⁽⁶⁾なのである。

彼の印象は、ヨーロッパのコズモポリタンとして暮している中年女性達マリアやバラスのそれとは対蹠的である。彼女らとの交流が彼を成長させていく訳だが、バラスは次の様に述べる。

‘We’re all looking at each other—and in the light of Paris one sees what things resemble. That’s what the light of Paris seems always to show. It’s the fault of the light of Paris—dear old light!’

(P. 207)

すなわちパリの灯の下で皆はおたがいに見守り合っているが、見えるものは似たりよったり、パリの灯は目新しいものを照らし出すことはないというのである。マリアやバラスにとっては、ストレザーに多彩で多様と映った諸現象は陳腐な昔なじみのことに過ぎない。つまりストレザーにとって場が生に結びつ

き、生に満ちている故に目新しいとすれば、マリア達にはその故にこそ陳腐になる訳である。

場と生の結びつきはストレザーが始めてチャッドのアパートを訪れるシーンで明瞭に示される。ブルーバール・マレルブにあるアパート三階のバルコニーを見上げるストレザーには建物の石の外観が次の様に感じとられる。

....the complexion of the stone, a cold, fair grey, warmed and polished a little by life—— (P. 96)

灰色の冷たい石が、人の住んでいるという事実によって少々暖められ磨かれている——つまりストレザーの眼には石までも生と不可分な状態で存在する訳である。問題は描写された暗示的な現象とともに、それを映し出している彼の眼の方にもある。ストレザー自身バラスのように *dear old Paris, dear old light* と嘆じ得るようになるまでは、彼の眼に映るパリのこうした光景はヴィジョンとして留まっている。が、そのヴィジョンは、彼が場を受け入れ、場の中に融け込み、それ故に生に参加し、己れを少しでも変革しようと試みるその原動力となるのである。

(2) 場による生の具象化・場の神秘性

ストレザーの生への参加は、まず現在のチャッドを迎え入れることから始まり、更にチャッドとその相手の女ヴィオネ夫人の間柄を容認し受け入れて進展する。既にパリジャンと化してしまった様なチャッドは、髪に白いものが交じり青年から中年へと移っていく一種の老いの美を見せ、独身の55才のストレザー自身が却って若く感じさせられてしまう。チャッドは実りのない情事に月日を費してきたはずなのに、身のこなしや応待ぶりは洗練され充実して生の輝きに満ちている……このような変身の様が一時に溢れる様にストレザーに印象づけられて、彼の心を当惑させるとともに魅了する。

彼がチャッドを見守る際に感じたこれらの印象は、やはり先に述べたパリという場の魅惑的な多彩さ、多様さの印象と似かよっている。というよりこれは場とそこに生きる人の切り離せない渾然一体となったヴィジョンなのである。つまりパリはチャッドという人物を通して、その多彩な生というヴィジョンを具象化させてみせている訳である。これは場の人格化とも言えるが、このような

描写は後に、ヴィオネ夫人とその住居のシーンに於ても繰り返される。

ストレザーのこのようなヴィジョンを強めたのはパリ自体の帯びている性格にもよるのである。チャッドがストレザーの前に現れた時彼は成長し変身しつつある姿としてではなく、もはやパリでの仕立てが完了した姿となっている。彼の途中の過程を知り得ない故にパリはストレザーにとって神秘に映らざるを得ない。彼のガイド役をかって出たマリアも、チャッドの相手の婦人が自分の旧友であると気付いて引下り、ストレザーに二人の間柄を彼自身の眼で確認するよう薦める。ストレザーが彼を取巻く知人達に対して、「当地では知りたいことをぶしつけな質問で聞き出す訳にはいかない」と述べ、*'I suppose exactly to see for myself—without their aid.'* (P. 109) とつぶやくとき彼はパリの他人に対する無関心、無干渉の風習を既に理解するのである。これは以前ジェイムズが新聞通信員としてパリ在住(1875～6年)の際の彼自身の実感に基くものでもあろう。

Henry did obtain limited entry into certain French houses and had brief glimpses—all the more tantalizing—of what he would have liked to know. He might have fancied himself a sort of Eugène de Rastignac, laying siege to Paris, *enviously eyeing the great houses in the Faubourg St. Germain, yet unable to penetrate their mysterious existence.*(7)

と述べられているジェイムズの様子は上述のストレザーと似通っている。またジェイムズが「フランス人は誰かを誰かに引き合わせる習慣を持たぬ」(8)と嘆じたとき、その習慣の真否は別として、彼には既にストレザーの素材と基盤は生じていたのである。何故なら、このような事態では、あくまでも自己の眼で見守り、そこに映るものがたといヴィジョンであろうともそれを受け入れる他はないからである。かくしてストレザーの行動の枠が規定される。すなわち彼がまのあたりにしたチャッドによる生のイメージの具象化と、しかも彼の成長の過程を他から知らされないうちに生じるその神秘化という二つの作用によって規定されるのである。

(3) 場による生の象徴化

次にチャッドの導きによってストレザーが名彫刻家グロリアニの屋敷での園遊会に参加する場面になるが、ここでも場は印象的な彩りを添えている。

The place itself was a great impression —a small pavilion, clear-faced and sequestered, an effect of polished parquet, of fine white panel and spare sallow gilt, of decoration delicate and rare, in the heart of the Faubourg Saint-Germain and on the edge of a cluster of gardens attached to old noble houses. (P. 195)

冒頭に述べた如くジェイムズの知人の逸話が生じたあの庭園はこの箇所で行われている。この場の中で社交慣れた人々が楽しげにゆきかい対話し合う、そしてストレザーはさりげなくチャッドの相手の女マダム・ド・ヴィオネに引合われる。これらの人々こそストレザーの憧れる生の中心に位置している人々なのである。ストレザーはこうして束の間、自分の求めようとする人生を垣間見ている訳である。なかでも主催者のグロリアニ夫妻の充実し洗練された姿は異彩を放っている。それは先にチャッドを形容したbrutalized, refinedという言葉をも更に一步押し進めた状態で述べられる。

Were they, this pair, of the “great world”?—and was he himself, for the moment and thus *related to them by his observation*, in it? Then there was something in the great world covertly tigerish, which came to him across the lawn and in the charming air *as a waft from the jungle*. Yet it made him admire most of the two, made him envy, the glossy male tiger, magnificently marked. (P. 219)

ここでは場を野性の香の漂う密林になぞらえ、その中心に潜むグロリアニを艶のいい一匹の虎として表現しているのである。この象徴的表現はストレザーのこの度のヴィジョン（グロテスクなまでに艶々しい生の充実）をふさわしく言い当てている。象徴的な表現は同時にテーマの最も簡結な表現であり得る。すなわち、場はそれ自体遠心的表現に過ぎないが、その中に置かれるものの象徴的イメージが適格であるとき、主人公の見るヴィジョンを他の如何なる説明にも勝って、却って求心的に表わすことができる。つまり場とその中心にきりめくもの、この遠心性と求心性の組合せのみで、中間の性質を帯びない場合に

ヴィジョンが成立するのである。

ストレザーの感動は彼の傍らにいる知人の青年画家ピラムに対する衝動的な呼びかけとなる。

‘All the same don’t forget that you’re young——blessedly young; be glad of it on the contrary and live up to it. live all you can; it’s a mistake not to. It does n’t so much matter what you do in particular, so long as you have your life.’ (P. 217)

ジェイムズが聞いた逸話の中の言葉は、ここでストレザーによる生への呼びかけ、働きかけとして用いられている。ただ、未来を持つピラムとは対照的に、‘and now I’m old; too old at any rate for what I see.’と述べる彼の言葉の中で、生のヴィジョンは彼にとってもはや実現の時期が過ぎ去っている、という一見否定的な面から表現されている。が、ヴィジョンは、それが実現しそうになくなったとき却ってヴィジョンとして強まる性質のものでもある。ストレザーの‘And now for the eye I shall keep on you!’ (P. 219) という冗談めかした言葉のように、彼は見守ることに徹して、（それがヴィジョンから切離されないための唯一の方法なのだが、）彼自身も新たに、ある意味で積極的に生き始めたのである。

(4) 場の妖精・二つの世界の調和—理想郷のヴィジョン—

彼がグロリアニ亭で垣間見たグロテスクなまでに充実しきった生のイメージに対し、ヴィオネ夫人の住居で感じた印象は又異なっている。ヴィオネ夫人の描写もその住居の詳細な描写から始まる。ジェイムズにとって場は主人公を一瞬の中に反映させる何よりの武器なのである。

——he found himself making out, as a background of the occupant, some glory, some prosperity of the First Empire, some Napoleonic glamour, some dim lustre of the great legend; elements clinging still to all the consular chairs and mythological brasses and sphinxes’ heads and faded surfaces of satin striped with alternate silk. *The place itself* went further back——that he guessed, and *how old Paris continued in a manner to echo there*; but the post-revolutionary

period, the world he vaguely thought of as the world of Châteaubriand, of Madame de Staël, even of the young Lamartine, had left its stamp of harps and urns and torches, a stamp impressed on sundry small objects, ornaments and relics. (P. 244)

この対面の場では、ヴィオネ夫人の容姿の説明は省かれていてその生活空間の方が強調されている。時の経過により美化されたナポレオン一世時やそれ以前のパリの風物が、雰囲気がストレザーの眼にゆかしく映っている。そのゆかしさはやはり住人のヴィオネ夫人自体と混然一体であり、ストレザーは自分の心の憧れる理想郷にたどり着いているかの如き喜びを感じる。

昔のパリがゆかしくこだましているような場、それはそれ自体一つのテーマになり得るかもしれないが、そのような場にある人物を登場させるとすれば、その人物は場の人格化として、ストレザーの憧憬を考慮すれば、場の妖精として現れるであろう。ストレザーはヴィオネ夫人に彼の憧れる場パリの妖精を見ている訳である。ここでヴィオネ夫人の個性が現実感を伴って感じられ得ないとする批評⁽⁹⁾が成立つとすれば、それは逆にストレザーの妖精を見るそのヴィジョンの描写の成功を物語るものであるとも言えよう。ストレザーがノートルダム寺院のほの暗い本堂でみかけた祈っているヴィオネ夫人の姿もまた妖精じみている。

He was conscious of how much it was affected, this sense, by something subdued and discreet in the way she had arranged herself for her special object and her morning walk—he believed her to have come on foot; the way her slightly thicker veil was drawn—a mere touch, but everything; the composed gravity of her dress, in which, here and there, a dull wine-colour seemed to gleam faintly through black; the charming discretion of her small compact head; the quiet note, as she sat, of her folded, grey-gloved hands. It was, to Strether's mind, as if she sat on her own ground,.... (Vol. II, P. 9)

社交の場であでやかな *femme du monde* と感じられた夫人は、この場で

はひっそりとつつましく優美にみえる。ヴィオネ夫人とチャッドの関係を推量するストレザーに対し、夫人は、チャッドを知るということは即、私自身を知ることです、と返答する。が、このノートルダム雰囲気の中でストレザーは夫人に清楚なものを感じて、二人の間柄を清純で精神的なものだと信じるようになる。

ここでストレザーのヴィジョンの経過を振り返ってみたい。

自己の人生の漠然とした不満一パリの情景の多彩さ、多様さの印象—チャッドのアパートを見て生の暗示—チャッド自身を見て洗練と野性の印象—グロリアニ亭園遊会での更に高められた生の充実のイメージ……

ここには生の暗示→具象化→象徴化という一連のプロセスがみられる。

なおストレザーのより切実な身の上から眺めれば、最初に自分の人生が単調で味気ないと感じ、次に自分の憧れるものは漠としているが、若さ、自由さ、気兼ねのなさ、快楽、多彩な生活という様な自分には無かったものだと知り、それらは結局、グロリアニのような艶々しいまでに充実した生のイメージとして総合されるものであり、自分はそれから疎外されもはや取返しがつかないらしいと覚るが、ともかくも見守ることによりその自分の憧憬の対象とつながりを保っていかうとするのである。

さらにチャッドとヴィオネ夫人の間柄についてのストレザーの見方の変化がある。チャッドを放蕩者と考え、ヴィオネ夫人を悪い女と判断し、次にチャッドの成長をまのあたりにし、生の充実という自分の新たな憧れに基いて二人を理解し肯定するようになる。しかしヴィオネ夫人にはグロリアニ亭での生のヴィジョンそのままではなく、その変形をストレザーは見出すのである。つまり生の輝きといっても、それに伴いがちな過度の官能とか放恣、放縦さを除けた清楚な印象である。彼が後程ヴィオネ夫人の美を説明して、*'she has such variety and yet such harmony.'* (Vol. II, P. 300) と言っているのがこれに相当する。しかしこれはグロリアニ的光輝、官能の世界と、ストレザー側の（新大陸・ウーレット+彼の内閉的個性による）自律、抑制の世界の止揚でもある。ストレザーはこの二つの異質要素の調和を、昔のパリのこだまするゆかしい場に立つヴィオネ夫人の美に見出している訳である。

この後ストレザーはチャッドを帰国させる任務を捨てて二人の結婚に積極的になり、ヴィオネ夫人もストレザーを信頼し好意を持つ。ストレザーは自分の得なかった生の代償として二人を見守り、二人を最後まで見届けようと決意する。いわば彼はチャッドという媒体を通してヴィオネ夫人に結びつくのである。ストレザーの約束不履行を怒ったウーレットのチャッドの母親は第二の使者達をパリへ派遣し、彼に対決させるが彼の気持はもはや動じない。しかし事態は彼の情熱に相反する方向へ動いていく。チャッドを帰国させればもらえるはずのあらゆる報償をストレザーは捨ててしまった。にも拘らず、チャッドは既にヴィオネ夫人に飽いている如く、自分が帰国するか否かをストレザーの胸三寸に任せきりにしてしまう。ストレザーにも、自分が余りに己れを顧みず、他人に尽し過ぎているのではないかという疑問がよぎる。

(5) 場によるテーマの視覚化

かくしてストレザーは一度頂点に達した己れのヴィジョンを幾分翳らせながら一人パリ郊外の田園に散策に出かける。

彼はまわりの光景一空の色、清らかな流れ、ざわめくポプラや柳等を見渡している時、若い頃欲して得なかった一枚の風景画を思い起す。彼の今居る場は、心の中に久しく埋れていた一枚の絵に象徴される青春の一コマと結びつくのである。その絵を手に入れることなく過ぎてしまったように、彼の青春も自覚されずに過ぎていき、パリという場に立って始めてそれに気が付き、パリに住む人々の生を遠望し、それに近付こうとする努力が彼の生のヴィジョンを描いていった。今眼前に開けている風景は一枚の絵となってストレザーのヴィジョンのプロセスの行きつくところを一瞬視覚化してみせている訳である。しかし彼はこの絵の中に何かが不足していることを感じる。

What he saw was exactly the right thing—a boat advancing round the bend and containing a man who held the paddles and a lady, at the stern, with a pink parasol. It was suddenly *as if these figures, or something like them, had been wanted in the picture, had been wanted more or less all day, and had now drifted into sight, with the slow current, on purpose to fill up the measure.* They came

slowly, floating down, evidently directed to the landingplace near their spectator.... (Vol. II, P. 256)

その不満を充たす様に、流れに沿ってチャッドとヴィオネ夫人を乗せたボートが岸边に立つストレザーの方に近付いていく。

この場の光景は、テーマであるチャッドとヴィオネ夫人の結びつきとそれを見守るストレザーの位置づけを最も明確に示してくれる。副次的な人物も説明も消え去り、ただ象徴的な場に居る三人の人物とその関係がくっきりと浮き出ているのである。ストレザーのヴィジョンの意味も明瞭にされる。すなわちこの場に於て、チャッドとヴィオネ夫人の間柄はあらゆる意味での結びつきを示すものであったことがストレザーに分かる。彼等二人はやはりグロリアニ的光輝、官能の世界の住人であり、ストレザーはその世界の外側に立っていることを実感するのである。しかもこのたびは二人に対するつながりの気持ではなく、隔絶の方を認識するのである。それは又ストレザーのヴィジョンの方が彼等二人を超越してしまったことを意味する。生の官能と光輝を示す世界と抑制自律の世界が交わり調和する清楚な場をストレザーは束の間夢想した。が、それが彼のヴィジョンに過ぎなかったことを彼は認識させられた。ヴィジョンがヴィジョンとして自覚されるとき現実世界が現れる。ストレザーの接してきたパリのさまざまな場は、こうして彼のヴィジョンの萌芽から成長へ、そしてその喪失（言い代えれば現実へ）までのプロセスを緩慢に、遠心的に、そして時には何よりも求心的なイメージを伴いつつ表現し続けたのである。結末として、チャッドはパリでの享楽生活に飽み、ヴィオネ夫人と別れ第二の使者達と共に帰国を決意する。ストレザーは己れのヴィジョンの喪失とともに何処へかパリを去っていく。

ところでプロセスのみに終始する追求は単一化の危険を伴いがちである。もう一度舟遊びの場に立戻ってみたい。それはヴィジョンから現実への推移とともに、見守る者と見守られる者との対照化の問題でもある。ストレザーがその視野の中に一枚の充実した絵を眺めているかたわら、チャッドとヴィオネ夫人はたがい眺め合っている。ただしそのために二人は彼等の生全体を見通すことはできない。つまりジェームズの作品に於て生は生の外側に立つ者によって

はじめて確認され得るとも言えるであろう。残る問題はストレーザーの今後の運命にあるというより、むしろ見守る側と見守られる側の間のこの比較対照が、我々の心の中で如何に統合されて生の全印象を形成していくかの方にある。

(三)

以上私は「使者達」の中からパリのさまざまな場を抜き出し、それらが主人公の生のヴィジョンとどのように関連し合っているか、またその暗示、成長、喪失の過程をどのように促しているかについてプロットの進行に沿いながら考えてみた。その結果を総括的に言えば、一般の作品に背景として用いられがちな場が、ジェイムズの作品に於ては主要なキャラクターの役目を果たしているということである。しかし、これはジェイムズが場の舞台的な、あるいは絵画的な効果の方を人間より大事に扱っているということではない。ジェイムズには、生きるための場という、より内発的な問題があった。

ジェイムズは空間的な傾向を持った作家であると言われている。歴史小説には関心を示さなかった如く彼は世界を常に現在の空間として捉えていた。¹⁰⁾従って彼が場を求める努力は即生きるための努力を表わしているのである。彼は永らくイギリスに在住し、イギリスの社会をテーマにした一群の小説を書きながらも、彼の眼は再び舞台の広い国際状況の方へ戻っていった。つまり彼が自分の住んでいる社会環境に飽足らなくなったとき、ストレーザーの様な主人公と同様に、彼は彼自身の魂の落着く場所を再び求めなくてはならなくなった。が、ストレーザーと異なり、彼には新世界も旧世界も熟知の限りであり、永らく積重なったそれらの印象は彼の心を飽和させていた。結局ジェイムズは「使者達」を書くとき、それらの印象とともに己自身の世界に閉籠った。その結果、再度取上げた国際状況の問題は、以前よく用いた両大陸双方の要素を比較対照させ、その異質性をことさらに描く類のものとは異なってきた。その変化とは、国際関係の要素がより個性化され切実にされたこと、言い代えれば主人公のヴィジョンの密度がより高められたことである。

ところで国際状況はジェイムズにとってテーマである前に何よりも先ず素材であったことが強調されねばならない。ストレーザーがアメリカ国の repre-

sentative であるよりむしろ一箇の人間であることの方が注目されねばならない。innocence, naïveté, curiosity の性格を持ちながらも、その人生に於て青春を実感し得なかった初老の紳士という設定は、もちろん新大陸側の要素なくしては産れ得なかったとしても、こういう人物設定が新旧両大陸の素朴な対比にふさわしいとは思われない。また彼を受入れる旧大陸の場バリの方も決して客観的、写実的描写でもって述べられてはいない。その光景は、あくまでもストレーザーの個性の持つ眼がそこにどのような意味があるかを探りつつ読みとっていったバリの光景なのである。とすれば、このような光景は絶えず我々の前に開ける。我々も又我々のヴィジョンに沿って生きていくからである。ジェイムズが自己のみの世界に閉籠っていたために小説中の個々の描写がいくらか客観性、写実性を失ったとすれば、それは却って主人公の個性によるヴィジョンの純化という形で補償される。それはたとえジェイムズが素材としたような国際状況が消失した後にもなお生残り得る性質のものであると言っているであろう。

(註)

○テキストは The New York Edition of Henry James (Scribners) の 'The Ambassadors' I・II 巻を用いた。

○引用文中のイタリックス部分は全て筆者による。

- (1) Stephen Spender : 'The Contemporary Subject' ('Twentieth Century Views', Henry James, A Collection of Critical Essays ed. by Leon Edel, 中に収められている。P. 104)
- (2) 'The Notebook of Henry James', ed. by F. O. Matthiessen and Kenneth B. Murdock, PP. 373~374
- (3) Ibid. P. 226
- (4) E. M. Forster : 'Aspects of the Novel' (Pelican Book) P. 157
- (5) 'The Notebook of Henry James', P. 374
- (6) Marius Bewley : 'Henry James and Life' (ヘンリー・ジェイムズの世界—ジェイムズ評論集—北星堂) 中に収められている。P. 296, P. 293

- (7) Leon Edel : 'Henry James' (A Biography, 'The Conquest of London')
PP. 228~229
- (8) Ibid. P. 230
- (9) F. R. Leavis : 'The Great Tradition', ('The Later James' の項参照)
- (10) 谷口陸男 : 「失われた世代の作家たち」 PP. 176~177

(昭和41年9月29日受理)